

少々傷み困っていた。引率者の配慮で、今日は馬車に乗せてもらうことになり助かった。出発後、隣で寝ていた軍曹らしい人が棟木の下敷きとなり死亡されたと聞き、この事情がどうして留守宅家族に伝えられるだろうかと思った。名前もわからず行方不明のままにされるだろうと思うと、誠に申し訳なく残念に思いません。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

引揚げ―帰国

昭和二十一年九月十六日、北安にて日本人引揚げが定まり出発する。健康体組が一日早く出発されたが、途中、緩化駅より鶴岡炭鉱へ回され、七年間以上も帰国が遅れ、多数の死亡者もあったようである。

九月三十日、錦州駅に着いてから、半月間乗船待ちし、十月十七日ようやく出発した。葫蘆島着、待ちに待った「ダモイ」の日が来た。過ぎ去った軍隊生活、戦争、ソ連抑留、満州逆送を思い出した。

葫蘆島を最後に母国日本へ向かった。この船の船員の、郷里彦根市出身の平塚六雄氏に出会った。初対面であったが戦後日本の状況を聞かせていただいた。こ

の船は間違ひなく博多に入港し日本上陸だから安心するよう、ここで初めて真実の言葉に触れたのである。

十月二十三日上陸、復員手続きを終わる。

昭和二十一年十月二十五日、帰宅する。家族、母、妻、長男、全員無事であった。

おわりに

ソ連との開戦、二站陣地に爆雷を背負って敵戦車に体当たりし爆破した勇士、終戦を知らず。肉攻戦に生命を捧げた戦友、帰国を前にして亡くなった無名の方々、戦友のご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成十二年八月十五日 五十五年目の終戦の日 記

所 感

京都府 毛 呂 嘉 一

私の出生地は網野町で、大正五（一九一六）年生まれで、十一年兵である。私の学歴は小学校の高卒であるが、歳をとってから大学入試資格をとり、その後近

大の通信制に進みましたが、途中、本校のスクーリングを残して退学しました。

以上が私の学歴であり、職業も最終的には織物を加工する会社に七十歳前まで勤め、退職後はもっぱら好きなグランドゴルフやゲートボールが私の何よりの生きがいで、毎日頑張っています。

さて、次に私の兵役について申し上げますと、最初は昭和十二（一九三七）年支那事変勃発後間もなく、九月一日、福知山二十連隊の留守部隊、当時、佃、志摩両中佐の配下として第二機関銃中隊の所屬となり、翌年九月、中支で活躍中の大野部隊より南部部隊に変わった直後、補充兵として当時の大別山の追討作戦に参加し、翌十四年八月八日、内地へ部隊凱旋しました。二度目の応召があったのは大東亜戦争のさなかの十九年三月で、京都の深草の連隊で、その後八月十五日、択捉島守備隊である三原部隊に編入されたが、その後すぐ、択捉島で終戦を迎えた。

終戦前までの日米決戦の模様はニュースなどで知り、圧倒的に米軍有利の中、日本軍の玉砕が相次ぐ

ありさまで、我々も当然米軍の上陸かと思われていたが、来たのは米軍ではなくてソ連軍で、それは八月二十八日であった。

捕虜となった我々がソ領の沿海州のポートワニナ港に輸送されたのは九月十九日で、そこよりまた貨物列車で五十キロメートル先のムリー地区収容所に送られたが、仮兵舎で一夜を明かしたとき、ダニが上からポタポタ顔の上落ちてくるので、その防御に一苦勞した。また沿海州の冬は厳しく、零下何十度の極寒にさらされ、ノルマ百パーセントという重労働を課せられ、食事は毎日黒パン一個、夜だけスープがあるという食事であった。そのため私もすき腹に耐えられず、なけなしの時計とか万年筆等をパンや煙草と交換し、飢えを凌ぐありさまでした。

私達の主な作業は、松の木の伐採とか貨物列車の荷の積みおろしであるが、ときには建築作業場のれんが積みとか、糧秣倉庫でジャガイモの選別等の仕事もあった。ここではソ連の女囚人も働いていた。

しかし、こんな苦勞もやがて消えるときが来た。そ

これはオッペ検査で「オカ」になり入院できたことで、毎日ベッドの上で寝たり食事ができて、まるで地獄から天国へ来た心地がするほど気楽な身分になれたからだ。また帰国一、二年前には抑留軍人による楽団演奏会などの慰問も受けたり、また帰国前のナホトカで野球試合をやったが、ちょうどここで巨人軍の水原選手が投手として登板、相手チームはだれも打てなかったことを聞かされた。

私達は思い出と深い絆を後に昭和二十四年八月、無事ナホトカより舞鶴港へ上陸、帰国いたしました。

ソ連軍侵攻そして抑留

京都府 小西源吉

出生から入隊

京都府竹野郡丹後町上野（旧竹野郡下宇川村上野）にて、大正六（一九一七）年十二月四日生まれる。下宇川尋常高等小学校を卒業。卒業後は間人バス会社に

入社。

父、母は弟出産後死亡、兄夫婦と自分の四人。

ソ連軍侵攻前

昭和十四（一九三九）年三月十日、満州国新京（長春）南嶺、関東軍自動車第一連隊第四中隊に現役兵として入隊。

在隊中の主な行動はノモンハン、支那^{せつがん}浙贛作戦、熱河討伐。

昭和二十年三月、部隊より陸燃四平本部に転属し、勤務は関東軍司令部にいた（第四課）。その後出張所が設けられた。人員八人。

ソ連軍侵攻

ソ連軍は八月九日、満州に侵入したので、新京出張所を閉ざして四平本部に引き揚げる。関東軍司令部では書類を燃やす煙が各所に上っていた。トラックに人員と荷物を積んで南下した。道中、野戦貨物廠の前の通りは満人が食糧の奪い合いで、走るのに苦労した。

四平本部は作業中止。部隊長、少将小川団吉閣下は会議に出席で不在。各部の将校の指揮に従って行動し